

## 第1回 世界健康首都会議

### ○企業の取組み紹介

株式会社三菱総合研究所プラチナ社会研究センター長 村上 清明 氏  
「持続可能な超高齢社会の実現に向けて」

こんにちは、三菱総合研究所の村上でございます。

私の方からは、持続可能な超高齢社会の話をしたと思います。

これまで持続可能といいますが、ほとんど環境面の話だったと思います。

ところが、環境面に関しては少なくともどうすればいいかということはわかっています、CO2の話でしたらそれを物理的に減らせばいいということです。

難しいのは、超高齢社会の場合は、高齢者を減らすわけにはいきません。高齢者が増えて上で、どうやって持続可能な社会を作るかということが重要なわけです。

20世紀に世界の国は大きく2つに分かれました。一つは工業化に成功した先進国と、それがまだ成功していない途上国ということです。

私は、21世紀には、さらにその先進国が2つに分かれていくだろうと思います。

一つは、先進国になり、モノが豊かになって高齢化が進む、それが高齢者が増えてシルバー社会になってしまうということです。

シルバー社会になって社会の活力が落ちる。社会の負担が増えるという社会です。

これが今世界中が高齢化社会を非常に悲観的に見ている理由かと思います。

その先頭にある日本が世界的にみると将来が非常に悲観されている原因かと思います。

ただ私は、これが唯一の道ではなく、工業社会が終わった後に、されに今までよりも活力ある社会が作れるのではないかと考えています。

これは三菱総合研究所でプラチナ社会という形で提案しています。

ちょっと考えて見ましても、工業社会は人類の中で4000年の歴史の中で、わずか成功した期間はわずか200年しかありません。

一番長いイギリスでも、120年。次のアメリカが60年。日本はわずか30年。中国がおそらく20年ぐらいだと思います。

要は工業社会で持続可能な社会をずっと築くことはできないんだ。これは人類の発展の過程の一時期の姿であって、その成功の先の暁の高齢化社会で、いかに持続可能な社会を作るのか。それが我々の非常に重要な今の課題だと思います。

ではこのシルバー社会とプラチナ社会を分けるものはなにかということですが、

それは高齢者を社会の中でどういうふうに見ていくのか、いま日本の中で、議論されているものの多くが高齢化になって年金負担が増える、医療や介護費が増える話ばかりが出ている。

これはなぜかという高齢者を社会のコストだとみているからだだと思います。

いま日本には高齢者といわれる方が3000万人もいます。その方が社会のコストになればこういうことになります。

ただ一方で、高齢者というのは、経験も知識も思考力もあるわけです。

最初に小宮山理事長が話になられた、高齢者は思考力はずっと最後まで、伸びていくんだということと言いますと、大変な資産です。

あと日本の高齢者は幸いにたくさんお金を持っている。

時間も持っている。また社会に何か貢献した参加したいという意欲もあります。こういうひとたちが3000万人いるのですから、これを社会の資産として社会の担い手になってもらおうというのがプラチナビジョンの考え方です。

高齢者が増えた場合に社会のどこが破たんするのか。一番に弱いのはどうも日本は財政ですが、これは先進国すべてがそう見えます。

いまのEUを見ても先進国かあらゆる先進国がみなさんこの持続可能な財政というところが破たんします。高齢者が増えて財政破綻しないようにするにはどういうふうなモデルでむすびつけていくのか。

その一番のキーになっているのが健康、もう少し言いますと自立して生活ができるということです。

この健康や自立に必要なものというものは非常にたくさんいろんなものがあります。これを提供していくことが、すなわち健康産業だと思います。

ここで終りではなくて、健康や自立したその次に積極的に社会参加をしてもらう、社会でいろんな役割を果たして、尊厳のある生活をしてもらう、こうすることでシニアが消費者として社会が支えていく、そして一定の役割を担ってもらうことで社会の担い手になっていただく。これが結果的には、社会保障費を抑制します。

これは医療や介護だけではなくて、一番資産を持っている消費者が、シニアが消費していただくことで若い方の雇用や産業もできるということです。

失業保険も、生活保護も減る。

それから税収も増える。結果的に持続可能な財政も作れる。これがわれわれが提案する持続可能な社会モデルです。

こういった健康の価値で、おもしろいデータがありますのでご紹介します。

こうやって健康になることでいったいどれだけ経済価値があるのだろうか。

ということで経済産業省の方で2006年に生活者の意識アンケート調査をやっています。

日本は一人当たり年間、健康寿命が1年延びると80万円の価値がある。

いっぽうアメリカは10万ドル 800万円、10倍の差があるわけですが、日本がわずか80万円によければ、せいぜい寝たきりが5年だとしますと、400万円払えばPPKになれるということですから80万円はぜひぶん控えめな、数字ではないかと思えます。

そうしたものをベースに2005～2015年までの健康寿命を延ばすことの経済価値を試算するとこの10年間で110兆円、年間10兆円ぐらいの経済的攻勢が向上するという

試算結果が出されています。

年10兆円というのは、非常におおきな数字のように思えますが、医療とか介護費が今、年間で40兆円使っている。

高齢者が3000万人いて、80万円としても24兆円あるということを考えますと、10兆円はそれほど大きな数字ではない。

要は健康というのは数千億という単位ではなくて10兆円単位の大きな経済的価値がある。これをうまく市場価値に転換することができれば、非常に大きな産業となる。

ではEUはどうかといいますと今年の3月、EUが活力ある健康な高齢へのEUパートナーシップというものを発表しています。

そこではこのように描かれています。

高齢者が長く健康で自立して暮らし、社会で積極的な役割を果たし、高齢化社会が財政に与える影響を軽減しましょう。

2番目に、社会福祉、医療制度の持続可能性と効率を高めます。

最後に高齢化の課題に対応した革新的な製品やサービスを提供して、新たなビジネス機会を作りましょう。

これは我々の考えていることとまったく一緒です。

われわれは、いままでアメリカは市場原理主義、ヨーロッパは福祉と想っていたが、ここに書かれているのは、その両者を合わせて、さらにプラスアルファのかい(?)を作っているということをごさいますて、今日おいでいただいたドイツとスウェーデン、我々と非常に近い考え方ではないかと思っています。

さてその実現に必要なことしまして今回少し産業ベース、企業ベースの話として私は4つの話を考えている。

1つは、健康を産業化していくためには、社会的な実証の場が必要である。

2点目は、技術を商業的な成功に導くためのコンセプトが非常に重要である。

3点目は、そうしたサービスや商品を単品ごとに大量に配るという発想ではなくて、ライフスタイルを含めて、まちづくりを通して提供していくということです。

最後は制度設計ですが、日本では、社会で必要なだけけれども儲からない。社会ではほとんど役に立たないけれども儲けるということがたくさんありますが、健康に関しましては、社会に必要なものがやはり事業としても成立するようなインセンティブであったり、規制であったりファイナンスであったり、税制であったりこういったものが重要です。

最初のテストベッドということですが、実は日本にはこうしたテストベッドがありません。EUではスウェーデンのヴェステロース (Västerås) 市にロボットダーレンというテストベッドの場所があります。

人口13万人の街ですが、世界中から200社が集まって3自治体4大学が参加している。

ロボットといいますが、パソコンに足がついているようなもので、日本人の感覚から

いくとロボットかよという感じですが実はこれが先ほど言った非常に市場のコンセプトという意味で重要です。後でお話しします。

このロボットダーレンですが、年間で3.5億ユーロの、そんなに日本の経済力からしたらたいした金額ではありませんが、これが非常に大きな社会的にも産業創出の貢献をしている。

ロボットダーレンのWEBページとそれから案内を見ると

こういったことが書かれています。

ロボットダーレンとは、完璧な実証の場です。スウェーデンイズパーフェクトテストベッドとなっていますがこれは病院だけではなくて、いろんな高齢者施設、市民も含めていろんなものが新しい技術にオープンで、そうした技術を実証する場を提供してくれている。

2番目はアイデアを商業的な成功に導く

アイディ ツウ マーケット と書いてある。

3点目は、先ほどのロボットですね、あれを作っている会社のCOの方がこう言っています。

「 」 これも非常に意味のある言葉です **Doing the Right Things ?**

正しくはやっているけれども、正しいことをやっていないことはまああるわけです。

4610

手続きだけは正しいが、やっていることがおかしいのではないか。このロボットだ一れんでは、正しいことをやることに注力している。

日本にもほとんどの技術はあります。

ベッド、歩行器具、入浴も、食事の支援もあります。移動もあります。

これらのことがあれば、ほとんどのことは自立支援のことはできるわけです。

あとこういった技術をどうしてその市場に持っていくかということです。

もちろんこれからヨーロッパにもいろいろ技術を持っていく場合に、ヨーロッパでテストすることは重要です。

ただアジアは、非常に高齢化が速くて、40億人の人口の高齢化社会が間もなくそこに来ているのでやはり日本にも実証の場が必要だと思います。

EUとですね、日本とお互いに情報の交換をすればいい。

その場所として、私は松本市が非常に適していると思います。

その理由は、医療機関、高齢者の施設だけではなくて、一般の市民です。今日お話を聞きましたら、非常に士気が高くて、勉強好きで、理屈っぽくて、まさにテストベッドとしては、最高の場ではないかと思います。さらに研究機関も大学もあります。

そうして重要なのが生活の質です。

こういった研究者は、いい生活の場所にしか来ません。

まちも、文化も、自然も景観も素晴らしい。高等教育圏があります。「三がく」といわれたように非常に良い教育機関があります。

コミュニティもあります。ということです。

ただし一つ欠けているとしたら技術を商品化する人材ではないかと思えます。

先ほどのスウェーデンのロボットダーレンでは、ABB という企業が、元 ABB におられた方が、それをやっておられました。

ABB はグローバルな企業で、ロボットも作っている会社ですが今日お集まりのヘルスケア一関連の企業の方がたくさんおられます。

そういった企業からも共同でそう運営をすれば、日本でもできますし、ロボットダーレンと提携してすることもあるかもしてません。

先ほど商品コンセプトの話をしましたでしたが、一つ向こうでこういう例を聞きました。

これは高齢者のコミュニケーションロボットです。

2つあります。左の側は先ほど見た、PC に足を付けたようなもの、映っている女の子は、お孫さんで、離れたところでPCを見て画面に映っています。

これは WIFI で会話ができるようになっていますが、おばあさんが家の中を歩くとロボットと一緒に歩いてくっついて行ける。

何のことはない動く PC です。

右側は、人工知能を備えていて、おばあさんの言うことに反応して 50,000 以上の言葉をしゃべれる。

そして、脳トレもしてくれる。

何か健康の相談をすると全部答えてくれる。

ロボットでございますし、LED やセンサーが付いていますし、相手の顔を見て表情も変えられる。

どちらが成功したかという、左です。

右は飽きてしまう。

2番目の理由は、右のロボットは本当は孫がやればいいのですが、孫がやるには大変なので、人の代わりにロボットを使うという発想です。

左は、おばあちゃんがコミュニケーションをとりたいのは孫です。だけれど孫が来るのはたいへんなんで、人間のコミュニケーションを助けるのがロボット。

ロボットは、人の代わりにやらずに、人と人とのコミュニケーションを支えるのがロボット、ということです。

そして

お年寄りに困ったことがあったらこのロボットを通じて教えてあげる。

ロボットが何かやってしまうと高齢者にとっては、尊厳が保てない。

お年寄りの自立を助けるという意味ではこちらの方がいい。

どちらが日本製で、どちらが は聞かなくてもわかると思いますが、こういったことは日本ではたくさんある。

こういったことも議論するだけではなくて、やはり試す場があればわかる。

ですから日本にいろんなアイデアがありますけれども、こういうのを持ち込んでやってみる、それを市場でテストする場がいかに必要か。これは非常に投資効率のいい施設ではないかと思います。

つぎにまちづくりのお話です。

高齢者が一番元気なシニア50代後半から80代までの元気なシニアが、何を望んでいるかというと、アクティブで健康で、嬉々とした生活ライフスタイルだと思います。

それを一つ一つの技術や商品として提供するのではなくて、ライフスタイルとして提供しようということです。

これはアメリカのニューハンプシャー州にあるダートマス大学のすぐそばに作った、ここが、高齢者の住むコミュニティになっています。

400人が住んでいまして、20年前にオープンした時は60代で入れましたが、ほとんど亡くなる方がなくて健康だったこともあって、20年たったら平均年齢が84になって、アメリカの平均寿命79を5つもオーバーしている

ところが、400室350室、ある中で、重介護と認知室に入っている方は60室ですから、85%が健康で生活している。

街の中が、病院もあって、きれいな部屋もあって、戸建ても居住もある。

ただこれなら日本でもできます。

こういった高級老人ホームらしいものは、日本にもたくさんあります。違いは、ライフスタイルでありまして、一緒に食事をしています。

食事しているのを見ていただきますと日本で老人ホームの食事というのは、パジャマきて食事しているところが多いのですが、みなさんジャケットを着て、女性はお化粧をしています。

それから大学ですね、いっしょに学んで一緒に講座で、議論しながら学んでいます。

80以上のサークルで一緒に遊んでいます。

こういったライフスタイルをすることで、非常に健康な生活ができています。

そこのマーケティングディレクターの方の言葉によると、このシニアレジデンスという一番重要なのは住人そのもので、その方が資産です。といわれます。

ヘルスケアの担当のディレクターが言うには一番健康で重要なのは、他人とつながっている。しかも誰かの役に立っているという実感があるということです。

これ私も非常にいいと思うのですが、日本だと一つなにか足りないような気がする。

日本人はどうしても働き蜂のようなことがありますから、これに就労の機会が毎日でなく、たまにどっかで働けて、多少の収入がある機会が加われば、こうしたライフスタイルは、非常に日本人にとっても魅力的になるのではないかと思います。

是非ですね、こういったことを日本のどこかの街を通じて、アメリカもちいさなコミュニティがあります。全米で70か所。

シニアコミュニティだけと全米で100か所以上あります。

日本は、こういった老人ホームがありますが、お年寄りが弱者という発想のものがありますが、シニアこそ人生の一番いい時期 ゴールデンエイジでそこを大いに楽しんでもらうというところはありません。

それをやはりどこかの町で、単位でやっていただくのが、非常に重要かと思えます、どこでやるかということですが、環境の時に行われたこうしたヨーロッパの先進的な街はだいたい人口20万くらいの街です。

ストラスブール、グルノーブル、フライブルク、カールスル 大体人口20万前後の街です。

松本は 環境にも非常によろしいですし、健康にもいいし、非常に人口20万でにぎわいがあります。

日本の人口20万都市の駅前に行くと、ほとんどシャッター通りになっていますし、郊外のショッピングセンターまでに全部お客さんがながれてしまって、お年寄りの方は買い物に不自由しています。

日本で魅力的な20万都市は少ないわけですが、松本市は人口24万人、しかも先ほどから何回か言ったように街の中に中心市街地が残っています。

歴史も文化も残っています。郊外に自然も残っています。

ぜひ日本で、魅力的な人口20万の都市のモデルになっていただきたい。

そう思っています。

人口20万の都市は日本にこれだけあります。

日本で元気のいい街は、100万都市ばかりです。

もう20万、30万の都市は非常に元気がないのですが、じんこう20前後の都市は83都市あります。

これが元気になれば日本全国の都市も元気になります。

しかも先ほど言ったいろんな政策をやりやすい郷(?)でもあります。

ぜひ松本からこういった新しい街をヘルシーシティを作って、そして高齢者が資産となる社会を実現しましょうというのが、私の最後のメッセージであります。

それが民間企業にとっても、非常におおきなビジネスチャンスを作ると信じております。

私の講演は以上であります。どうもありがとうございました。